むかしは綿わたを作るとき、綿弓わたゆみという弓で打ったので、綿を打つ仕事をする人のことを弓打ちと呼びました。

むかし、あるところに、綿屋がありました。そこにひとり息子がいました。

息子はばくちが好きで 持っているお金をみんなばくちに使ってしまいます。父親は怒って、

「おまえのようにばくちばっかやってはだめだ。わしももう年だから、おまえがしつかりしないといけない。家を出て商売でもしろ」といって、家を追いだしました。

息子は、

（それならほうろくでも売ろうか）と思って、たくさんのほうろくをかついで歩いて行きました。

つえについて、ふうふういいながら山道を登っていくと、どこからかゴソゴソゴソソ声が聞こえて来ました。

（何かしらん）と思ってひよいと見ると、男が何人か、しげみのかげでばくちをしていました。息子は、そうつとのぞいているうちに、

（あつ、半はんをはっているけど、丁ちやうじゃないとだめだ）

（ほら見ろ、やっぱり丁だ）と、夢中になってしまいました。そして、力を入れすぎて、ほうろくをささえていたつえが、ひよいと外れてしまいました。とたんに、ほうろくは、バタバタバターつとくずれて、みな割れてしまいました。ものすごい音がして、ばくちをしていた男たちはみなびっくりしました。そして、

「化け物だあ」と、逃げて行ってしまいました。息子は、

「えらいことをした。ほうろくをみんな割ってしまった」といって、ひよいと見ると、

男たちがばくちをしていた所に、お金がたくさん置いてありました。息子は、

「ああ、うまいことをした」といって、そのお金をぜんぶ拾い集めて、また歩いていきました。

そのうち、日が暮れてきました。すると、古いお寺があったので、泊とめてもらおうと思つて、声をかけました。けれども、だれもいません。しかたがないので、息子は、「おじやまします」といって、中に入りました。そして、天井裏に上がっていきました。

真夜中、息子が寝ていると、下で、ゴソゴソゴソ声がありました。

（今頃、なんだろう）と思ってそつとのぞくと、男がたくさん集まって、ばくちをしていました。息子は、

（さっきのやつらがいるかも知れない。見つかったら大ごとだ）と思って、音をたてないようにして、こっそり見ていました。けれども、もともとばくちが好きなので、つい夢中になってしまいました。思わず力が入って、そばに置いてあった壺つぼやら皿わやらを、男たちの上に、ドシャーっと落としてしまいました。さあ、みんなびっくりして、たくさんのお金を置いたまま、逃げて行ってしまいました。

息子は、天井裏から下りてきて、お金を拾い集めました。

「なんだか、運がついているなあ」

あくる朝、息子は、

（これだけお金を持っていたら、何でもできるぞ。何かおもしろいことがないかなあ）
と思いながら、歩いていきました。すると、むこうから、

「紀州きしゅうさまのお通り」と、先払いさきばらいをして、大名行列がやって来ました。息子はあわてて、行列の前を横切よこぎりって、道を渡わたってしまいました。すると、侍さむらいが、

「無礼ぶれい者もの、お殿とのさまのご前ごぜんを横切よこぎりるとは、何事だ。手打ちにいたす」といって、息子を
しほりあげてしまいました。

お殿さまは、息子に、

「お前は何者か」とききました。

「はい。綿屋の弓打ちでございます」と、息子は答えました。すると、お殿さまは、

「なに、弓撃ゆみうちち。それはよかった。ちようど弓の名人を探していたところだ。じつは、吉野川よしのがわの中州なかすに、化け物屋敷があつて、毎晩、化け物が出る。これまで、だれが行つても退治たいぢすることができず、みな食われてしまった。おまえが、その化け物を退治したら、わしの姫ひめの婿むこにしてやるぞ。いやだというなら、手打ちにする」といいました。

息子は、弓で綿は打てるけれど、矢を撃つたことなどありません。けれども、手打ちにされるのめかなわないので、困ったなあと思ひながらも、化け物屋敷に行くことになりました。

ところで、お殿さまは、

（あんなうす汚よごれた旅の人と結婚するのはいやだわ。もし化け物を退治して帰ってきた

らどうしよう) と思いました。そこで、お弁当に毒を入れて息子に持たせました。息子は、何も知らずに、喜んでお弁当をもらって、弓と二十本の矢を持って、化け物屋敷に出かけました。

息子は、

(もうどうなっても仕方がない。お殿さまの前を横切ったときに、首を切られたと思えばいいんだ。化け物に食われたって、仕方がない) と思いながら、家来についていきました。

ところが、化け物屋敷に着いて、家来がみな帰ってしまつてひとりきりになると、恐くなつてきました。

「これはいけない。早くどこかに隠れなければ」

息子は、急いで二階に上がりました。けれども、あわてていたので、お弁当を、下にわすれてきてしまいました。

(ああ、おいしいことをした) と思いましたが、取りに下りるのも恐いので、(もう食べなくてもいいさ。)と、そのまま横になつて待つことにしました。

夜中になると、黒い大きいカワウソの化け物が、出てきました。息子が二階から見ていると、カワウソは、お弁当の包みを見つけて、がさがさ食べ始めました。そして、毒に当たつて、ころつと死んでしまいました。

息子は、カワウソが動かないので、

「うまくいったぞ」といつて、下りて来ました。そして、持ってきた二十本の矢を、カワウソの目に入れ、鼻に入れ、口に入れ、わきに入れ、ぜんぶ押しこんでしまいました。

朝になると、家来たちが、

「あいつ、化け物に食われてしまったにちがいない」といいながら、やってきました。ところが、息子は、部屋の真ん中に座つて、いねむりをしています。そばに大きなカワウソが死んでいて、二十本の矢が、みな急所に立っていました。

「これは、すばらしい。弓の名人だ」と、みんなはびつくりして、息子をお城に連れて帰りました。

お殿さまも喜びましたが、お姫さまも、

「あのときは、たよりなく思つたけれど、弓の名人だし」と、息子のことが好きになりました。

息子は、お姫さまと結婚して、仲よく幸せに暮らしたということですよ。
おしまい

村上郁再話

資料『奈良県吉野郡昔話集』國學院大學説話研究会